

特別展「自然の博物館 100 年の軌跡」 — 標本陳列所から自然史の足跡をたどる —

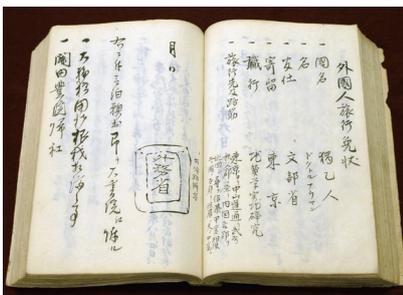
井上 素子

令和 3 年は、当館の前身にあたる「秩父鑛物植物標本陳列所」が大正 10 (1921) 年に開設されてから 100 年となります。秩父地域は、「日本地質学発祥の地」といわれ、地質学黎明期から研究が盛んな地であり、大正時代には地質巡検（フィールドワーク）のために全国から研究者や学生が訪れていました。その便宜を図るために、神保小虎（東京帝国大学教授）の指導のもと秩父鉄道株式会社が開設したのが「秩父鑛物植物標本陳列所」です。戦後には、藤本治義（東京文理科大学教授）の尽力を得て同社により、全国に先駆けて自然史系総合博物館「秩父自然科学博物館」が開設されました。

当館はこの活動を受け継ぎ、昭和 56 年に全国初の県立自然史系総合博物館としてオープンし、以来、埼玉県の自然分野の標本や情報を集約・発信する役割を果たしてきました。本特別展では、このような 100 年に及ぶ博物館のあゆみとこれからの展望を紹介します。

(1) 地質学の曙と秩父

秩父地域は日本列島の地質構造を明らかにする上で重要な場所であり、明治時代前半の地質学黎明期において先駆的な研究が行われていました。「日本地質学の生みの親」と称されるドイツ人地質学者、E. ナウマンやその指導を受けた日本人地質学者によって最もよく調査され、日本列島の地質構造研究の礎が築かれて行きました。



三峯神社日鑑（三峰山博物館蔵）

明治 11 (1878) 年 7 月 29 日、ナウマンが付添人 1 名とともに三峯神社に宿泊した記録がある。



E. ナウマン

(提供：フォッサマグナミュージアム)

(2) 秩父鑛物植物標本陳列所

明治時代後半から大正時代にかけて、先駆的な研究を学ぶ場所として秩父地域が推奨され、秩父巡検案内が数多く執筆されました。秩父鉄道が秩父へ順次路線を延伸するに従ってアクセスが容易になったこともあり、秩父地域へは全国各地から多くの研究者や学生訪れるようになりました。

中でも最も頻りに秩父を訪れたのが帝国大学鉱物学教授 神保小虎です。神保は明治 30 年頃から、年数回も秩父地域へ地質巡検に訪れており、秩父地域は「帝国大学の地質学の標本室」といわれていました。神保は巡検案内書を数多く執筆するとともに、地元有志の啓蒙普及にも尽力しました。秩父鉄道株式会社の総務課長 松崎銀平も神保の薫陶を受けた一人であり、自らが収集した標本に加え、著名な鉱物蒐集家 長島乙吉に標本収集を依頼して、その充実を図りました。そして大正 10 (1921) 年、これらの標本を基に秩父鉄道株式会社は「秩父鑛物植物標本陳列所」を開設します。

大正 13 (1924) 年には、学術的価値と景観が評価され、長瀬は国の名勝及び天然記念物に指定されました。

(3) 秩父自然科学博物館

東京文理科大学地質学教授 藤本治義は、卒業論文で秩父地域の地質構造を研究し、以来日本列島



絵葉書「秩父鑛物植物標本陳列所」(提供：秩父鉄道株式会社)
当館向いにある養浩亭の一角に設けられた陳列所内部。展示された標本のほとんどは当館へ受け継がれている。

の地質構造史研究を牽引してきた人物です。藤本は、秩父地域の学術上、教育上の重要性を深く認識しており、戦後荒廃していた陳列所の復旧を、秩父鉄道株式会社に依頼します。さらに「奥秩父総合学術調査」の必要性を説き、その研究成果を基にした自然科学博物館の設立の必要性を唱えます。この呼びかけに秩父鉄道株式会社が応え、昭和 24 (1949) 年、全国に先駆けて自然史系総合博物館「秩父自然科学博物館」が開設されました。学術調査・科学教育・自然保護教育・地方産業文化への寄与等、高い理念を掲げ、活動を開始します。これは、昭和 26 (1951) 年の「博物館法」制定を先取りする形となり、博物館界から注目されることとなりました。

(4) 埼玉県立自然史博物館

1970 年代になると、秩父鉄道株式会社において、社会教育における公的な役割は公的機関が担うべ



秩父自然科学博物館正面

埼玉県全域の学校が見学に訪れていた。入館者は年間 7～8 万人で、多い年は 10 万人を超えた。



秩父鉄道専用車両を用いた野外指導 (提供: 新井健司氏)

専用バスや専用車両を用いた観察会も行われていた。解説しているのは、学術主任で、後に埼玉大学の教授となる新井重三。

きとの意見が出されるようになりました。ちょうどその頃、埼玉県では県立の歴史、民俗系の博物館が次々と建設され、自然史に係わる資料を総合的に収集保管・展示する施設の必要性が唱えられるようになってきました。そして、昭和 56 (1981) 年、秩父自然科学博物館の 12,000 点に及ぶ標本を受け継ぎつつ「埼玉県立自然史博物館」が開設されました。

建築設計は、日本のモダニズム建築の巨匠、前川國男が手がけました。常設展示は、県内を代表する生態系を可能な限り実物で再現したジオラマ、多種多様な岩石の網羅的な展示など、県内の標本にこだわったものとなっています。

開設後は、パレオパラドキシア、アケボノゾウ、カルカロドンメガロドンなどの化石の発掘や「埼玉県植物誌」の編集を行うなど、埼玉県の自然史に関する標本や情報の収集活動を積極的に展開しました。

(5) 埼玉県立自然の博物館、そして未来へ

埼玉県立自然史博物館は、平成 18 (2006) 年に「埼玉県立自然の博物館」と名称を変え、再スタートしました。当館の特徴は、100 年に及ぶ博物館活動の歴史と、それに由来する県内の豊富な自然史資料にあります。古くから博物館があったからこそ、地域住民や蒐集家から、標本や情報が博物館に集まり、保存されてきました。現在、博物館には地域の文化的中心を担う役割や、学校教育との連携などが求められてきていますが、伝統と実績を受け継ぎつつ、時代の要請に応じていきます。

(いのうえ もとこ・主任学芸員)



設立当初の博物館内部

打ち込みタイルの建築、ワッフルスラブの天井、外部と繋がる吹き抜けと大きな開口部など、晩年の前川建築の特徴が色濃く反映されている。